

19) 大腸癌肝転移症例のリザーバーを用いた肝動注療法の経験

齋藤 六温・鈴木 晋
杉本不二雄・吉田 正弘 (刈羽郡総合病院)
関矢 忠愛 (外科)

H5年1月からH6年1月までに男4名女1名の計5名に療法を行った。同時性転移は3例、異時性転移は2例であり、両群の1例ずつが切除可能であった。カテーテル挿入の際肝動脈の一本化を1例に行った。抗癌剤はCDDP+ADM+5FU (PAF) 3例 ADM+5FU (AF) 1例 AF→PAF→MMC+5FU→THP-ADM, 1例に使用した。効果はCR 1例, PR 1例, PD 1例であった。有効例はいずれも最初から PAF を使用している。予後はCR 例は1年3月(肺転移発症) PR 例は8月, PD 例は1年8月でいずれも生存している。補助療法の2例も1年, 1年9月で再発なく健在である。合併症はカテーテルの変位による十二指腸潰瘍が1例, 肝動脈閉塞が3例にあった。

20) 鈍的外傷で発症した外傷性腸骨動脈閉塞の1例

押切 直・新村 浩明
内野 英明・岡崎 裕史
小熊 文昭・入沢 敬夫 (立川総合病院)
春谷 重孝・坂下 勲 (心臓血管外科)

交通外傷で左下腹部を打撲した後、外腸骨動脈の急性閉塞をきたし、外腸骨動脈—大腿動脈バイパス術を施行した1例を報告する。

症例は、54才、男性、交通外傷にて救急車で近医搬送され、大腿動脈を触知せず、血管造影を行ったところ外傷性腸骨動脈閉塞と診断され、当科紹介となった。CT, MRI で明かな解離を認めなかったが、閉塞性動脈硬化症の既往がなかったために、外傷性の急性動脈閉塞と考え、手術を施行した。

左外腸骨動脈は血栓で完全閉塞し、同部位を人工血管で置換した。術後 API は0.2から1.1と改善した。

21) 癌性気道狭窄に対する各種ステント治療の経験

相馬 孝博・広野 達彦
大和 靖・吉谷 克雄
中山 健司・土田 正則
青木 正・渡辺 健寛
江口 昭治 (新潟大学第二外科)
矢沢 正知 (新潟県立中央病院)
胸部外科

気管気管支の癌性狭窄に対する姑息的療法として、ステント留置は有力な方法である。我々は、シリコン製のデューモン・チューブと、金属製のストレッチャーステント(胆道拡張用 balloon expandable stent)を、主に用いて気道確保を行ってきた。ワイヤーを編んだ金属ステントは、シリコンステントに比して、より大きな内腔が確保できる反面、編み目からの浸潤に弱い。両方法の使い分けと治療成績について報告する。

22) 限局性の心嚢液貯留を呈した結核性収縮性心膜炎の1例

名村 理・山本 和男 (新潟こぼり病院)
丸山 行夫 (心臓血管外科)

症例は、61才男性で労作時の息切れを主訴に近医を受診。胸部X線写真では、軽度心拡大を認めたが、心膜の石灰化はなかった。心臓カテーテル検査で、平均右房圧の上昇を認め、右室圧波形は dip and plateau 型を呈していた。右室造影で、右室は狭小化していた。また、胸部 CT・MRI では厚い被膜を有す嚢腫が右室を圧排する所見を認めた。以上から嚢腫の圧排による右室の拡張障害と考えられたため手術を施行、嚢腫の被膜の一部を切除し、内容を除去することにより右房圧の低下を得た。術後の心臓カテーテル検査では、右室圧波形は正常化し、右室形態の改善が見られた。被膜の病理組織所見では、結核結節が認められ、限局性の心嚢液を有した結核性収縮性心膜炎と考えられた。

23) 左上肺静脈還流異常を伴った成人三心房症の1例

藤田 康雄・土田 昌一 (秋田赤十字病院)
心臓血管外科
宮村 治男 (新潟大学第二外科)

症例は39歳女性で、7歳時に ASD 閉鎖術を受けた。易疲労感、胸痛を主訴に平成6年1月、当院内科を受診。心エコーより三心房症が疑われた。心臓カテーテル検査、